「たかとりが明かす日本建国」の補記

卑弥呼宮殿跡を推理する

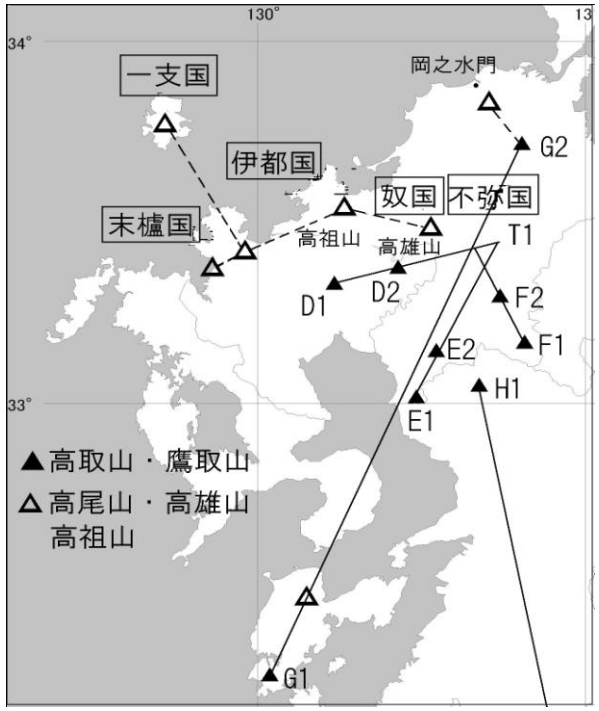
白崎　勝

（神奈川県中郡大磯町）

はじめに

高取山から鷹取山を結ぶラインは、神武東征・日本武尊東征が進んだ方向を示すベクトル（矢印）と考え、そのベクトルを追い日本建国の謎を解き明かした報告書が、「たかとりが明かす日本建国」です。全国に十八のベクトルが見つかり、そのうち九州には五対のベクトルがありました。

さらにそのうち三対は、朝倉市に向かっていてそこに三角形の領域を形成して、高天原の位置と東征前の倭国連合を記録していたのです。残り二対は神武東征が二手に分かれ、本隊は岡之水門方向に向かい、若御毛沼命（後の神武天皇）は一旦、球磨や薩摩など南九州を言向けして日向に戻り、そこから東征に向かった事を記録していました。



地図１　九州のベクトル

ベクトルは記録の第一層で、第二層の高尾山がベクトルを補助し、さらに第三層の〇尾山は〇の一字を変えて、東征各地の経路や出来事を残していたのです。魏志倭人伝に登場するクニの一支国・末盧国・奴国各想定地にそれぞれ高尾山や高雄山を残していました。伊都国のみは「たかお山」では無く、同じ「タカ」型地名の高祖山を残しています。一大率をおいた特別のクニと記す魏志倭人伝の記述と一致して、神武東征が卑弥呼の時代と近いことを示しています。

三対のベクトルが指し示す三角領域は、高天原であると同時に、卑弥呼時代の倭国の都があったところと考えます。であればそこには楼観・城柵を厳かに設けている卑弥呼の宮殿があったはずです。ベクトルにより、この時代の事柄を多く残していることが分かってきましたので、宮殿跡についても何らかの痕跡を残していると考えます。そこで痕跡をたぐり興味つきない卑弥呼宮殿跡を推理してみることにします。

卑弥呼が住んだ都

九州にある「たかとり山」は表１の通りです。

表１　九州のたかとり山

No	記号	山名	標高m	所在地付近の地名
1	D1	高取山	441	佐賀市大和町久留間
2	E1	高取山	139	福岡県大牟田市歴木
3	F1	高取山	721	福岡県八女市矢部村北矢部
4	G1	高取山	341	熊本県天草市二浦町亀浦
5	H1	高取山	328	熊本県山鹿市城
6	D2	鷹取山	403	佐賀県三養基郡みやき町
7	E2	鷹取山	364	福岡県みやま市山川町
8	F2	鷹取山	802	福岡県久留米市田主丸町
9	G2	鷹取山	620	福岡県直方市永満寺
10	H2	鷹取山	375	宮崎県都城市夏尾町

Ｄ１→Ｄ２、Ｅ１→Ｅ２、Ｆ１→Ｆ２の三つのベクトルが形成する三角形は朝倉市の扇状地にあります。この発見の経緯や意味するところは冒頭の書をお読みください。現代の地図に表すと地図２の通りです。高木・甘木・杷木と三つの木に囲まれて、その頭文字、高甘杷（たかあまは）から高天原（たかあまはら）を連想させます。高天原を「たかまがはら」と読むのでなく、高の下の天は「あま」と読むと古事記の冒頭に「訓高下天云阿麻下效此」とわざわざ記しています。

三角領域の頂部、扇状地奥には天照大御神を祀る美奈宜神社、底辺部にも大巳貴神を祀る同じ名前の美奈宜神社があります。三角領域の右やや外れてアマテラスのアとスを除いた麻底良山（まてらやま）があります。朝倉はこの麻底良を麻氐良と書いて、あさくらと読んだ由縁とも伝わります。天照大御神の痕跡が多く残る地域です。

ここを卑弥呼が住んだ都とすれば、魏志倭人伝に記す里程や方角をどのように読めば帯方郡からここにたどり着くのか、興味や疑念を持たれることでしょう。いろいろある説を全て読んだわけではありませんが、魏志倭人伝の里程からこの三角領域を特定した意見は見当たりませんでした。「邪馬台国は筑紫にあった（高倉盛雄）」のみが地形を戦略的に読み解きここを都と特定していました。

里程の解釈では、２００２年発行「邪馬台国論争の盲点（牧良平）」が最もと思われましたが、それでもこの領域を特定することはできず、甘木から八女市のあいだに都はあったとしています。この説をお借りして冒頭書の中で魏志倭人伝里程の解釈を詳述していますので、ここでは割愛します。

地図２　現代地図での高天原

宮殿跡の候補地

宮殿跡の候補に、伊都国の前原遺跡や楼観・城柵が見つかった吉野ヶ里遺跡、今回の三角領域付近にある平塚川添遺跡などが挙がっています。しかし決定的な証拠が見つからず、いまだに霧の中です。最近は大和の纒向遺跡で見つかった三棟の建物跡が、並んでいたことから、ここが邪馬台国で卑弥呼宮殿の一角では無いかとされています。

日本書紀の国生みの項一書（第十）に、「伊奘諾尊と伊奘冉尊は一緒に日の神を生み申し上げた。大日巫貴という。この御子は、はなやかに光りうるわしくて、国中に照りわたった。それで二柱の神は喜んでいわれるのに『わが子たちはたくさんいるが、まだこんなにあやしくふしぎな子はいない。長くこの国に留めておくのはよくない。早く天に送り高天原の仕事をしてもらおう』と。このとき、天と地はまだそんなに離れていなかった。だから天の御柱をたどって、天上に送り上げた。」と記しています。「全現代語訳・日本書紀（宇治谷孟）」

これは伊都国に卑弥呼が生まれ高天原に向かったことを言っていて、高祖山がそれの記録なのでしょう。伊都国は倭国の一員であって、ここにある平原遺跡は卑弥呼の宮殿跡では無いと考えます。

伊都国に生まれた卑弥呼が三角領域の高天原に送られたとすると、候補として平塚川添遺跡が有力になります。多重環濠があるこの遺跡は弥生時代中期から古墳時代初頭の遺跡で時代が一致しています。しかし、標高２０ｍ程度の低地にあって小石原川や筑後川から近く、頻発したであろう洪水の影響を受けやすい場所なのです。それと、気にかかるのは三角領域の底辺にあること、上座郡と下座郡があるこの領域の下座郡に位置することです。上座、下座がいつごろから使用されたか分かりませんが、高天原の記憶が地域にすこしでもあるならば下座とは呼ばないと考えます。

この三角領域の二つの美奈宜神社は下座郡にあり、これを境に東半分ほどから杷木までが上座郡です。この上座郡の中に卑弥呼の宮殿はあったと考えます。上座郡の筑紫川右岸の山麓に３０～５０ｍの高台で筑後川氾濫の影響を受けにくい地区があります。

この地区は高倉盛雄氏が著書で述べるように、大陸から攻められた場合に博多湾や有明湾からの進攻に備えて要の位置となり、王を守るに最適の地です。現実に、斉明天皇が新羅に滅ぼされた百済を助けるため、九州に下った際に、この地区に橘広庭宮を造り住まわれました。万一の場合、杷木を経て日田に向かう経路で避難することも想定していたと考えます。

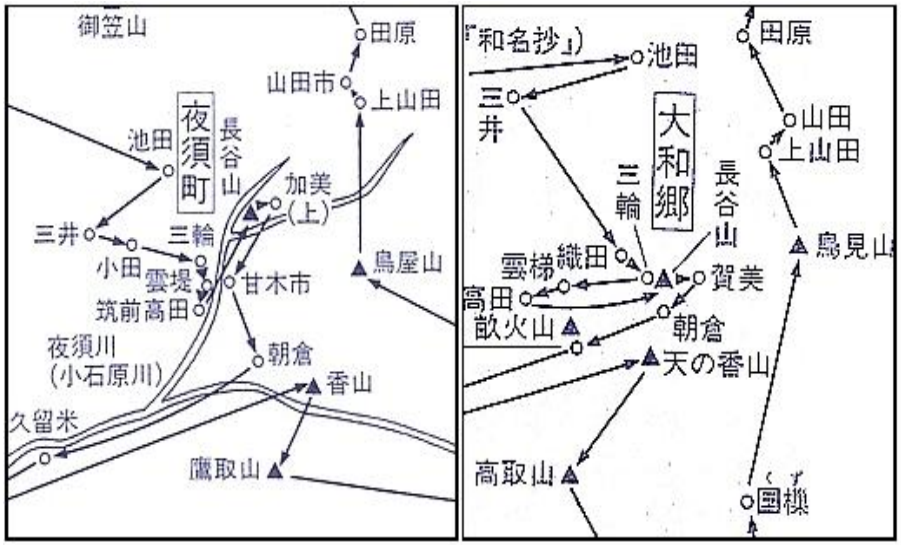
ではどんな方法で推理すればよいか考えてみました。概略次の方法です。

（１）　新旧の高天原を比較する。
（２）　日に向かう心から考える。
（３）　「たかとり山」を再検討する。
（４）　文献をあたる。
（５）　家族について考える。
（６）　現地を探索する。

推理１　新旧の高天原を比較する

冒頭の書で神武東征が遷都であったことを明らかにしました。新しい都は大和の橿原です。神武東征は宇陀から大和に入るにあたり、天香久山の土で平瓦などを造りお祀りしていて、天香久山が東征目的地のシンボルになっています。順に高・天・原となるのは、宇陀からの進攻を表すと同時に、新しい高天原の意識を残すためだったのでしょう。日本書紀にも古語として神武天皇の即位を「畝傍の橿原に、御殿の柱を大地の底の岩にしっかりと立てて、高天原に千木高く聳え、始めて天下を治められた天皇」と記しています。古語としていることから、この地が高天原であることは日本書紀を記すときには無くなっていた認識だったことが分かります。

安本美典氏が述べる朝倉の地名と大和の地名が一致する説の地図は有名です。拡大して再掲すると地図３のとおりです。右図の「天の香山」とある天香久山は、左図の香山に該当します。両図の朝倉と香山の相対位置が若干違いますが、左図に今回の三角領域を当てはめると、右図の畝傍山で表現される新しい高天原の橿原と概略一致することが分かります。



地図３　　安本美典著・平成９年発行最新「邪馬台国」論争より

旧の高天原をそっくり同じような地形の大和に移動させたのであれば、新しい高天原の御殿と同じ位置に旧の御殿、すなわち卑弥呼の宮殿があったと考えます。日本書紀によると神武天皇が都の中心とした位置は、天香具山から西３ｋｍの畝傍山の東南としています。この付近に御殿があったのでしょう。

そこで、朝倉の高山（地図３の香山）の西３ｋｍ付近をあたると、高山が筑後川のほとりにあるため筑後川左岸うきは市吉井町付近に行き着きます。標高２５ｍ前後の筑後川畔の低地で宮殿があったところとは思えません。

ところが、高山近くの北西側２．４ｋｍに先に述べた麻底良山があるのです。こちらの北西３ｋｍをあたると朝倉市上須川と呼ばれる地区があり、上座郡の範囲です。このあたりは５０ｍ前後の高台です。やや希望が見えましたがこの方法でこれ以上の探索は困難です。

推理２　日に向かう心から考える

卑弥呼は日巫女や日御子と呼ばれていたとする考えがあります。一方、天照大御神の名も太陽と関係します。三角領域から出発した東征も「ひのもとの大倭」を目指し、日を背に受けて大和に入ろうとしたのです。太陽を畏敬し日に向かう心があったと考えます。伊都国の平原一号墓の東には７０ｃｍの大柱があってその先は日向峠を指し示し太陽信仰に関係すると言われています。日向峠の先は朝倉の高天原方向です。伊都国に生まれた卑弥呼が日に向かった心の痕跡かも知れません。平原遺跡から麻底良山まで５３ｋｍあって方位は１１０度です。そしてここでの１１０度の方角は立春に日の出がある方向なのです。陰陽の考えは中国の春秋時代に始まる古い考えで、季節が陰から陽に転ずる立春が暦の起点になっています。この考え方がすでに伝わっていたのでしょう。１１０度ラインが推理１で候補となった朝倉市上須川地区を通過して麻底良山に向かっていてやや期待が膨らみます。

推理３　「たかとり山」を再検討する

推理１と２に挙がった朝倉市上須川地区が三角領域から外れていてやや気になるところです。Ｄ１→Ｄ２、Ｅ１→Ｅ２、Ｆ１→Ｆ２の三対のベクトルが高天原の領域を指し示していたことは先に述べましたが、どの山を対として選ぶかにあたって気になった不思議なベクトルがありました。Ｈ１→Ｆ２のベクトルです。このベクトルの先が三角領域の頂点Ｘ１へ同じように向かっているのです。これだけ良く考えた「たかとり山」の配置です。もっと何かが残されているのではと考えていました。

このベクトルも意識したものかもしれません。このラインをもう一度地図に書き込み確認すると朝倉市上須川地区を通過しています。Ｈ１が近くの彦岳を選ばずに目立たない山をＨ１としているのは、この上須川付近を厳密に指し示すためだったかもしれません。

そこで平原遺跡からの１１０度ラインとベクトルＨ１→Ｆ２の交わる点を求めてみました。地図４のとおりです。麻底良山から２．８ｋｍほどの地点になります。１１０度ラインの起点を平原遺跡から高祖山に変更すると、交点は１００ｍほど北に移動し山際になります。

地図４　朝倉市須川付近

交点付近は北に虚空蔵山、東に天皇山と呼ばれる標高差５０ｍほどの低い山に囲まれた平地です。虚空蔵山には古墳群が見つかっています。天皇山には月読神社、その上に高木神社があります。

推理４　文献をあたる

記紀には高天原付近の地名をいくつか記しています。

天の安河――素戔嗚命が父・伊奘諾尊の許しを得て姉に会うため高天原にやってきました。きっとよからぬ心があるのだろうと、天照大御神は武装して天の安河で向かえ討つことにしました。安本美典氏はこの天の安河は甘木の小石原川のことで、そのむかし夜須川と呼ばれていたと著書に記しています。三角領域の西端を流れていて、高天原の境なのでしょう。

天の岩戸――天の安河での誓約（うけい）の後も素戔嗚命の乱暴はおさまらず、天照大御神は傷ついて天の岩戸に籠もります。一方、「筑後国続風土記」は朝倉市の須川について次のように岩屋のことを記しています。「又此村上に古き塚甚多く相並べり。南方をほれば口あり。窟屋也。其内大なる窟屋もあり。」とこの村上の南側を掘ると大きな岩屋があると述べていますので、天の岩戸を想起させます。また相並ぶ古い塚が魏志倭人伝に記す奴婢百余人の徇葬の跡ならば、卑弥呼の塚も近いことになります。

天の香山――岩戸に籠もった天照大御神を招き出すため、神々は天の安河原で相談して岩戸の前に集います。このとき天の香山から、眞男鹿（まおしか）の肩の骨、根こそぎの眞賢木（さかき）、コケのたすき、まさきの葛、束ねた小竹葉などの種々を採ってきたと古事記に記します。「古事記（倉野憲司校注）」より。天の岩戸が天の香山からさほど遠くないように読めます。

ところで、候補地、朝倉市上須川の交点付近から東を見ると、麻底良山が大きく見えてその先の天の香山（高山）は見えません。なぜこの香山が高天原のシンボルの山となっているのか疑問に思います。ここでのシンボル、麻底良山から種々を求めれば良かったのにと疑問が生じます。思うに、麻底良山は天照大御神を象徴する山で、この山から種々を採ったり、この山を大和に移すなど恐れ多く、とてもできる事ではなかったのでしょう。そこで、麻底良山のすぐ南にある香山がシンボルとなったと考えます。香山の香は麻底良山に手向けた香なのかもしれません。

浮羽――浮羽は候補地・朝倉市上須川地区の南、筑後川の向こうにあります。日本書記は景行天皇が熊襲討伐の最後に浮羽村で食事されたと記しています。めったにお酒を飲まなかったのでしょう。浮はこの時、杯（うき）を忘れた由縁の地名です。冒頭書ではこの熊襲討伐が若御毛沼命の球磨や薩摩を言向けして日向から東征に出発した経路を、遡って高天原を訪ねた遠征だと明かしています。そして、最終目的地、高天原の中心を望む浮羽の鷹取宮付近で天照大御神に思いを馳せ食事されたのでしょう。大和に戻ってすぐ天照大御神を祀っています。

朝倉の社――日本書紀は斉明天皇の行宮・橘広庭宮を造る際に、「朝倉の社の木を切り払って造られたので、雷神が怒って御殿をこわした。また宮殿内に鬼火が現れた。このため大舎人や近侍の人々に病んで死ぬ者が多かった。」と記します。斉明天皇も宮に来て三ヶ月足らずにして亡くなっています。このようなおどろおどろした記載は他になく、異常な状況だったことがうかがえます。

上須川の交点付近から橘広庭宮までは１ｋｍあまりです。この付近にあった社ならば、この木を払って運ぶには苦の無い距離になります。そしてこのような理由ならば今も宮殿跡

が見つからないことに納得がいくのです。

推理５　家族について考える

素戔嗚命は根の国に向かう前に、天の安河に来ました。ここでの誓約は、素戔嗚命の男の子達五人を、天照大御神が引き取り育てるための儀式だったように思います。その後も素戔嗚命は計画していたように高天原で暴れて、追放となり出雲国に行きます。

天照大御神のもう一人の弟・月読命も日と並んで治めるのが良いと高天原に送ったと、日本書紀の一書（第十）に記します。その名の通り月の運行など、暦に携わったものと考えます。交点の近くに月読神社があることも偶然では無さそうです。古代では田畑の作業時期を決めるために、太陽が山のどの位置から昇るかを見て一年を測っていたと思います。月読神社の裏にある天皇山からは麻底良山が良く見えて日の出位置の観測に適した場所なのです。（図１）

西暦二四七年・二四八年の二年連続の日食は、卑弥呼の死や天照大御神の岩戸隠れと関連すると論議される事件です。二四七年の日食は博多湾への日没と重なったと計算されています。カシミール３Ｄで当日３月２４日の日没が天皇山でみえたかシミュレーションすると、背振山地から遠く離れているため十分に見えたと思われます。月読命により予測されていた現象と考えます。（図２）

預かった子達の長男・忍穂耳命を日向国に向かわせようとしたとき、子が生まれたので代わって天孫・邇邇芸命が向かうことになりました。こうしてみてくると、天照大御神を中心に家族総がかりの国造りだったことが見えてきます。高天原を代表する山・麻底良山山頂に家族が祀られていることも不思議ではありません。

推理６　現地を探索する

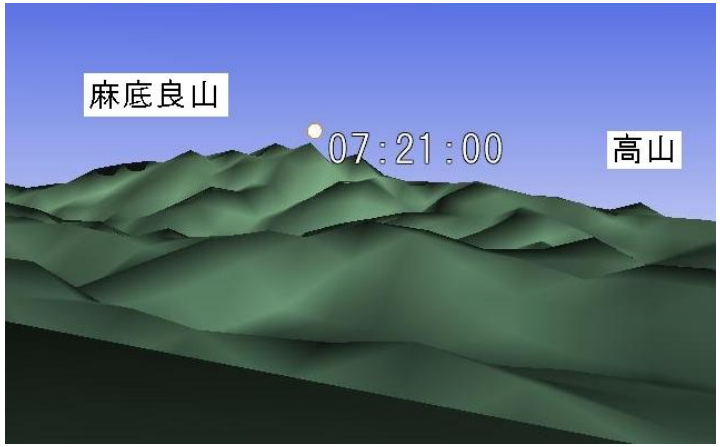


図１　天皇山から見た麻底良山と立春の日の出

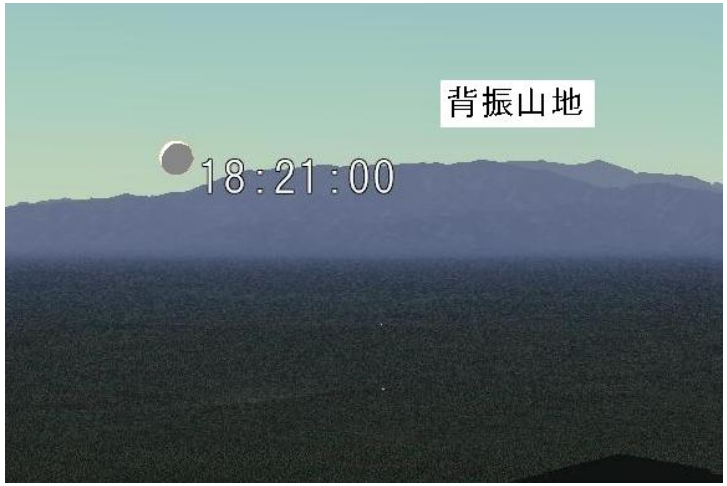
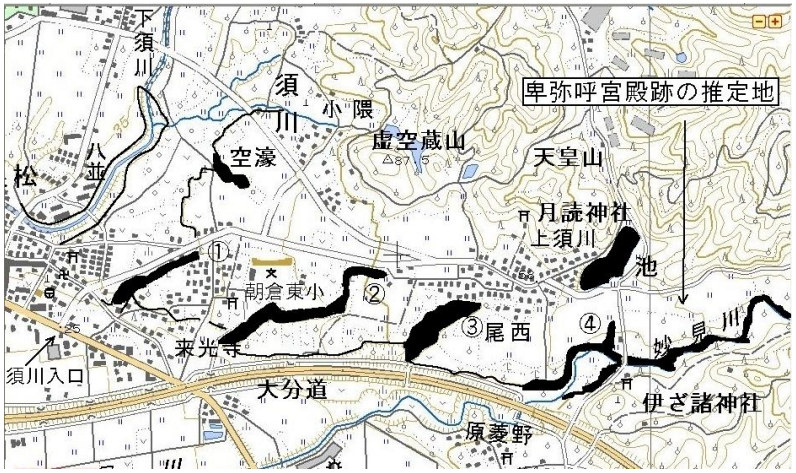


図２　天皇山から見た 247 年 3 月 24 日の日食方向

事前調査で、この上須川地区はほとんど発掘されていないことが分かりました。この地区の南の低地を走る大分道造成の際の調査では、数珠つなぎのように、縄文や弥生の遺物が見つかっています。従ってこの高台になにも無いことはないでしょう。

新緑の季節、九州在住のＯＢ先輩・上野禮一氏と上須川地区を訪ねました。日田に向かう国道３８６号の比良松交差点の先を左折するとすぐに緩やかな坂道になります。３００ｍほどで高台の須川地区に入ります。そこは、水田や畑が広がる見晴らしの良い里でした。ここを訪ねたところで、発掘するわけでなく何も見つからないと思いますが、いくつか期待がありました。①環濠らしき溝や濠が無いか。②月読命が天体観測したと考えた天皇山からの麻底良山の風景は確かか。③もしかしたら岩の洞穴が山際に無いか。などです。



地図５　朝倉市上須川地区の濠の分布

田畑の先の集落背後に麻底良山が見えてきます。古代の人が敬っていた山と考えても、不思議ではない特徴ある山の景観です。集落に入り月読神社、高木神社に向かいます。そこの案内板に南朝九十八代の長慶天皇が裏山の黒巌が気に入り、それで骨を埋めたので裏山が天皇山になったとありました。黒巌が気に入っただけでこの小さな山に骨を埋めたりするのだろうかと思ったりします。裏山の黒叢の中を５０ｍほど登ると頂上です。よく麻底良山が見えます。ここで月読命が空を日夜観測していたと想像するとロマンの心にみたされます。

事前に調べたネットの航空写真で黒く見えていた森が、深い濠であることが分かりました。地図５で黒く塗りつぶしたところです。遠くから竹藪のように見えましたが、近寄り中を覗くと深い濠になっていて深さ１０ｍほどもあり、幅は２０ｍ以上もあって、底には小さな川が流れていました。竹は濠が崩れないよう植えられたものでしょう。この濠が地図で分かるように上須川に向かってゲートのように四重になっているように見えます。最後のゲートが上須川の池とその南の濠にはさまれたところでしょう。なればその東の奥域は卑弥呼宮殿があったところではと考えました。同行した上野氏も興奮醒めやらない様子です。濠が突然のように始まっていて自然の小川を利用した計画的な造形に見えるのはひいき目な結果か、朝倉市の係りに問い合わせると川と認識していると、冷たい返事でした。

筑紫平野を見渡せる虚空蔵山に登り、そこで出会った古老に岩屋や塚の情報を仕入れて、麻底良山の手前の谷、奈良ケ谷に向かいました。大和の奈良とどちらが先につけた地名なのだろうと思ったりします。谷奥の峠にあるという岩屋は交通止めで行けませんでしたが、小

さいときから麻底良山を良く知っているという久保山正男さんにお会いしました。山中にある古い塚を案内いただきましたが、多くの塚の並びについては分かりませんでした。

集落内の石碑から上須川地区は大正二年に耕地整理されたことが分かりました。大正二年では遺跡に対する認識も低く土器が出ても発見とはならなかったのでしょう。ところでこの上須川がなぜ須川なのかずっと考えていました。そして天の安河の安河から「や」を抜いた「すかわ」ではないかとの思いに至りました。されば天の岩屋戸隠れにおける天の安河原における神集いが、ここから遠い小石原川とされる夜須川原でなぜ行われたのかの疑問が解けるのです。この須川での集いとすれば納得いくのです。

興奮を残したまま、上野氏を甘木駅に送りました。旅を終えた今も、集落の家々の庭に花咲く静かなこの地を掘り返して良いのか、それとも卑弥呼宮殿跡を明らかにし、日本の今あることの感謝のよすがとすべきかの相反する疑問は解けていません。（終）